全ての悲しみは雨となり君の悲しみ全てを流しさり　僕の全ての喜びはやがて詩となり君とと

美優夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＹ　Ｄｒｅａｍ　「僕の全ての悲しみは雨となり君の悲しみ全てを流しさり　僕の全ての喜びはやがて詩となり君とともに歩き続けますように」

【Ｎコード】
Ｎ８５４２Ｏ

【作者名】
美優夢

【あらすじ】
街外れのジャズ喫茶
そこに現れた影のある男・・・・
喫茶店のマスターとの出会い　ここからこの物語がはじまる

「**radio**」

２０１０年・・・初秋

カラン　カラン

「いらっしゃいませ」

「すいませんねぇお客さん　うちのお店は初めてですよね？
うちはジャズを聴かせるのが売りなんですけど生憎今日はレコードの方が調子が悪くて申し訳ありませんがラジオを流させてもらってます」

人の良さそうな初老のマスターは申し訳なさそうに男に話しかける

「あぁ・・別に構いませんよ　とりあえずブルーマウンテンをいただけますか？」

男は小さな声で一言そういうと静かに席に着き

寂しげな表情を浮かべて外を見つめる

ジャズが売りだとマスターが言うだけあり

薄暗くアンティークの食器や家具が並んだ趣のある店内には

不釣り合いな陽気なＤＪの声がラジオから流れてくる

・・

「ハーイお次は大阪府に住むラジオネーム葵ちゃんからのリクエストＯｈ！これは名曲だね～この曲聞くと自然に涙がとまらなくなるんです

是非かけて下さいってＯＫ葵ちゃんリクエストにお答えしちゃうよ～」

「それではお聞きください・・・ザザッ・・年のヒット曲

・・ザザザ・・・・のナンバーで・・ザザザザザっ・・Ｍｙ Ｄｒｅａｍ」

電波が悪いようでラジオの不快なノイズがはいっているようだ

「おや？ラジオまで調子が悪いな　本当にすいませんねぇ

はい　ブルーマウンテンお待たせしました」

一言そう言うとマスターは本当に申し訳なさそうな表情でコーヒーを男の前に置くと　ラジオから流れる曲を聴いて

「私ね普段はジャズしか聞かないんですがこの曲は好きで

良く聞いてるんですよ　なんて言うんでしょうか・・心から切なくなる

と言うか　この歳になっても初恋を思い出したりして　いやはや
なんともお恥ずかしい」
男にその話をすると先ほどまでの申し訳なさそうな表情は照れ笑いに変わっていた
すると
先ほどまで寂し気な表情を浮かべていた男は一変して
明るい表情になり
聞こえないくらいの小さな声で
「・・・ありがとうございます」
と呟き
「マスターすいませんがエスプレッソもいただけますか？
私の向かいの席に置いていただきたいのですが」
そう言ってエスプレッソを注文した
「おや？待ち合わせだったのですね？
わかりました　すぐにお持ちしますね」

そう言ってマスターは厨房の奥へと戻って行った

ラジオからはゆっくりとした先程のバラードが流れる・・・・・

「お待たせしました　お相手の方　コーヒーが冷めないうちに

おいでになるといいですね　・・それではごゆっくり」

そう言って男の前の席にエスプレッソを置くと

ラジオの曲に合わせて歌を口ずさみながら再び厨房へと戻って行った

晴れやかな表情になった男は小さく一息つくと

誰もいないエスプレッソの席に向かって話しはじめた

「やぁ　久しぶりだね　さっきの話し聞いていたかい？

君の歌はすごいよ　いなくなった今でもこんなに沢山の人に

愛されいつでも僕と伴にある」

そうやって静かに語りながらコーヒーを飲み干し

ゆっくりと席を立つと厨房に向かって

「すいません　マスターお勘定お願いします」

と嬉しそうな弾んだ声でマスターを呼んだ

すると厨房の中にいたマスターは

「おや？お連れ様はいらっしゃらなかったみたいですね？
それじゃエスプレッソの御代は結構ですよ」
そう言ってレジを打ちこもうとすると
男は大きく首を横に振って
「いえ・・そう言う訳にはいきません・・
確かに彼女はそこにいましたから」
そう言って口を付けずにそのままにしてあるエスプレッソの置いてある
テーブルを見つめる
それを聞いたマスターは一瞬不思議そうな顔をするが
「あなたがそうおっしゃるのであれば本当にいらっしゃったのでしょう
しかしエスプレッソの御代はいただけませんよ　なにせ私の自慢のジャズをあなたとお連れ様にお聞かせすることができなかったのですから
お連れ様の御代は私からの少しばかりのお詫びの気持ちなんですよ」

そう言ってそそくさとレジを打ちこみ男の手を握ってお釣りを渡し

「また　お連れ様とお二人でお越しくださいね

今度は私の自慢のジャズを沢山用意してお待ちしておりますので」

満面の笑みを浮かべてそう言うと

男は照れ臭そうに笑いながら

「はい・・是非また寄らせていただきます　良いお店ですね

本当にありがとうございました」

そう言って一礼すると

喫茶店を後にした

カラン　カラン

外は初秋の透き通るような青空で少し冷たくなった風が

男の横を吹きぬけていった

そう・・・・あの頃と同じように・・・・・

「Ｍｙ　Ｄｒｅａｍ」

僕の悲しみの全ては優しい雨となり君の悲しみを流し去り

僕の喜びの全てはやがて詩となり君と永遠に歩き続けますように

作

美優夢

次回第２話　「ｅｓｐｒｅｓｓｏ」お楽しみに♪

「espresso」（前書き）

時は遡ること１０年前　カフェドエル　全ての話しは此処から始まった

「espresso」

＜・・・10年前・・・＞

カラン　カラン

「いらっしゃいませ」

「あっお姉さんいらっしゃい」

店主の若いマスターがそう言うと

「いやいや　たっちゃんいつまでも暑いねもう秋だって言うのに

これは温暖化とかいうやつの影響だね絶対こっちは心も財布も氷河期だって

いうのにさぁ　あついのは心の中と財布くらいでいいんだよね」

このあっけらかんとした調子の良い女性の名前は美優夢

妹夫妻の経営する

この喫茶店　カフェ・ド・エルに昼休みの合間を見ては毎日のようにやってくる

「あれ？お姉ちゃんまたきたの？」

呆れた顔をして妹の依里加が厨房から顔を出す

美優夢は笑いながら

「なんだよ　依里加　お姉ちゃんが来てうれしいくせに

それにねここのエスプレッソ最高なんだよ他のお店なんかいけないよ」

そう言って笑いながら席に着くと

夫の達矢が洗った食器を布巾で拭きながら嬉しそうな顔をして

「嬉しい事いってくれますね　お姉さん　依里加もそんなに怒らなくて

いいじゃないか　折角お姉さんがこうやって毎日来てくれてるんだ

姉妹が仲の良い証拠だよ」

そう言って依里加を宥める

依里加はどうしても納得できない様子で

「もう　たっちゃんはお姉ちゃんに甘いんだから

うちはボランティアとかじゃなくて商売なんだよ

いくら姉妹だからっていってもお金をもらわなくちゃ

今日はちゃんと払ってよねお
姉ちゃん」
依里加は手を腰にあてキッとした表情で睨んでそう言うと
美優夢は
「あら　依里加　さっきの話し聞いてなかったの？お姉ちゃんさ
心も財布も氷河期なんだよ　困った姉を助けると思ってさ
ツケにしといてよ　出世したら出世払いで払うからさ」
それを隣で聞いていた達矢は苦笑いを浮かべ
依里加は本当に呆れた顔をして
「もう　しょうがないんだから　出世なんてしないでしょお姉ちゃん
いつまでもそんなバカな事ばっかり言ってないで早くいい人見
つけなさいよ
もういい歳なんだから　しっかりしてよね」
そうやって皮肉っぽく言うと
美優夢は別に気にした様子もなく
「ハイハイ　依里加さんのおっしゃる通り私は負け組女ですよ

それよりさ依里加そんなに怒ってばっかりいると顔にシワが増えて

達矢君に逃げられちゃうぞ」

おどけてそう言い返した

「もう　お姉ちゃんたら知らない！！！！」

そう言って依里加は怒ってドシドシと足音を立てて厨房の奥へと歩いていった

その姿を見て困惑した表情の達矢に

「やだねぇあの子は昔からああやって怒りっぽい所があるからね

たっちゃんも大変でしょ？」

そうやって美優夢が言うと

達矢は笑いながら

「あれはあれで依里加の可愛い所なんですよ

お姉さんに言った言葉も本心ではないでしょうし」

そう答える

「ハイハイ相変わらずお熱い事でごちそうさま
まぁ私も依里加のあんな所が可愛いんだけどね
だからさっきのようにわざと意地悪したくなっちゃうんだよね」
美優夢も笑いながらそう答えると
厨房の中へと入っていった依里加を呼んだ
「依里加　依里加　お姉ちゃんが悪かったからさ　もう怒らないで
機嫌直して出ておいでよ　今日はちゃんとお金も払うからさ
それよりこの間　舞の所に遊びにいったんだけどそれで面白
い話しが
あるん
だよこっちにおいで」
すると依里加は不貞腐れた表情で渋々厨房の中から顔を出し
「本当？　本当に払ってよね・・・それで面白い話って何？」
そう言いながら美優夢が座るカウンター席の前の達矢の横に立った
それを見て美優夢は待ってましたとばかりに話をはじめる

（続く）

次回第3話「ｄｒｕｇｓｔｏｒｅ」ですｗ

お楽しみに♪

「drugstore」（前書き）

・　姉と妹の他愛も無い世間話が続きゆっくりとした時間が流れていく・

「drugstore」

「うん　この間さ　あんまり暇だったんで舞の働いてる
ドラッグストアに行ったんだよ　それも普通にじゃなくて
帽子を深く被ってサングラスをかけてさ」
その話しを聞いてさっきまで不貞腐れていた依里加は
興味が沸いたのか
「なんでまたそんな事したの？お姉ちゃん普通に行けばいいじゃん
それで舞お姉ちゃんはどう
したの？」
さっきまで怒っていた事を忘れ普通に美優夢に聞いた
このように与えられた才能と言うべきなのか
美優夢はいくらふざけて相手を怒らせても話し方一つで
相手を自分のペースに引き込み
まるで何事も無かったかのようにしてしまう
そんな魅力がある

「あぁ　それでね舞の所に近付いていってからさ声を変えてね
すいません薬剤師さん　胸の動悸が止まらないんです
何か良い薬はないですか？って聞いたんだよ」
依里加はその話しが気になって仕方がないらしく
カウンターに身を乗り出し
「うんうん　そしたら舞お姉ちゃんは何ていったの？」
もう依里加の中で先程までの怒りは完全に消えていた
こうなると　もういつもの美優夢のペースである
「そしたら舞はね薬を持ってきて真剣な顔で動悸ですとこちらがよろしいかと
思いますがって言ってね　動悸も様々な症状がありますので
どういった場合に動悸が起きますかって聞いてきたんだよ」
カラン　カラン・・・・
依里加と達矢は美優夢の話しに夢中になっているのか
一人男性客が入って来たのに気付かずにいた

その男性客は静かに奥にある窓際の席へと腰を下ろした

「当たり前だよ舞お姉ちゃん薬剤師なんだから

それでそれで？お姉ちゃんは何て答えたの？」

そう依里加に聞かれた美優夢は真剣な顔でこう答えた

「うん　そこでお姉ちゃんはね　私あの人の事を想うと

動悸が止まんないんですって言ったんだよ」

すると真剣な表情でバカな事を言ったのが面白かったのか

「ばかだねぇ　お姉ちゃんそれでも舞お姉ちゃんは美優夢お姉ちゃん

だって事に気が付かなかったの？」

依里加は笑って美優夢に聞き返す

その横では達矢も必死で笑いを堪えているのか肩が揺れていた

「うん　お姉ちゃんがそうやって言ったらサ　舞は一瞬ハイ？って

顔したけど

あの子って昔から天然じゃんそれでも気がつかなくてもっと他に

症状は

ないですか?詳しくお聞かせ下さいとか言ってきたんだよ」
それを聞いて笑うのを必死で堪えていた達矢もついに吹き出し
笑い始めた
「舞お姉ちゃんらしいねぇ」
依里加も笑いながらそう言った
「それでさぁ　あんまりにも気付かないんでちょっと可愛そうにな
ってさ
お姉ちゃんそこでサングラスを外したんだよ　そしたらね舞ったら
鳩が豆鉄砲くらったような顔して・・・・あっ　お姉ちゃん・・・
・・って
言って持っていた薬をポトッて落したんだよ　なんかのコントみた
いに」
美優夢も笑いながら言う
「アハハ　もう笑いすぎてお腹いたいよ　それでどうなったの?」
依里加はもう笑いが止まらず涙まで出てきている
「それでお姉ちゃん懲りずに　薬剤師さんすいません金欠と恋に効
く薬も

探しているんですけどって言ったら　舞がね怒ってからさ

馬鹿につける薬はありません！！だって超ウケルでしょ？

アハハ　ゴホッゴホッ」

テーブルを叩きながら大笑いをし少し咽る美優夢

「アハハ　もうやめてお姉ちゃんお腹痛いよ　本当にバカだねぇ

なんで妹に会いにいくのにそんなことするんだよ

絶対そんなことお姉ちゃんしかやんないよ」

そう言って笑いが止まらない依里加の横で必死に笑声を押し殺していた

達矢も

「本当にお姉さんは面白いなぁ　ある意味才能ですよそれ　ハハハ」

そう言って声を出して笑い始めた

午後のランチタイムが過ぎた静かな店内に3人の笑い声が響き渡っていた

次回第４話「ｗａｔｅｒ」ですｗお楽しみに♪

「ｗａｔｅｒ」（前書き）

ほのぼのとした雰囲気が一変し張りつめた緊張がはしる

「ｗａｔｅｒ」

バン！！！！

和やかな3人の雰囲気を切り裂くように

激しい音が鳴り響いた

すると先程入って来た男性客が憤慨した表情で

こちらを睨みながら

「すいませんが　少し静かにしてもらえませんか？

考え事してるんですよ私は・・・・それに客が来ているのに

いらっしゃいませの一言もお冷も持ってこない何て言う失礼なお店

ですか？

ここのお店は・・・」

その言葉を聞いた依里加と達矢は慌てて

「大変申し訳ありませんでしたお客様　すぐにお冷をお持ちします

ので」

男性客に頭を下げながらそう言うと

急いで厨房の中に入っていった

「わかればいいんですよ　わかれば」

ボソボソとそう男性客は言うと
再び席に着き窓の外を見つめた
この男性客
スーツ姿ではあるがネクタイは着用しておらず
シャツははだけ
その胸には輝きを放つネックレス
そしてその繊細な顔立ちからは一般的なサラリーマンとは違った
雰囲気を漂わせ
何かうまくいかない事でもあるのだろうか苛立ちを隠せない表情で
窓の外を見つめ煙草を吹かしている
男は煙草を揉み消すと
テーブルを叩きながら
「バン　バン　バン」
「ちょっとまだですか？私だって暇じゃないんですよ」
そうやって怒り口調で厨房に叫ぶ

その言葉を聞いた依里加は

「はい　大変すいませんお客様　すぐに持って参りますので」

慌ててメニューを手に取り

男性客のもとへ行こうとすると

先程まで黙って座っていた美優夢が徐に立ち上がり依里加の持つ

水の入ったコップを取り上げた

「依里加お姉ちゃんに貸しな！」

そう一言いって男性客のもとへ向かう

「ちょっとお姉ちゃん」

依里加は慌てて美優夢を止めようとするが

エプロンがテーブルに引っかかって動けない

「お姉ちゃんてば！！」

そう叫ぶも美優夢にその声は届いていない

ツカ　ツカ　ツカ

「遅かったじゃないか！いつまで待たせるんだよ全く」

そう男性客が美優夢に向かって言うと

バシャ！！！

「お待たせしましたお客様　ゆっくりお飲みくださいね」

そういって男性客の頭に持っていた水を零した

達矢と依里加は驚き

「！！！！お姉ちゃん」

「お姉さん」

二人同時に叫び

「お姉ちゃん何やってるの？お客様だよ

なんてことするの？本当にすいませんお客様

たっちゃんタオル持ってきて」

依里加はそう達矢に指示すると

男性客のもとへ向かう

「いったいなんなんだよ　お前！！」

男性客は怒りに溢れた表情で美優夢を睨みつける

美優夢はそれに臆することなく男の眼を見てこう言った・・・・

（続く）

次回「ｔａｘｉ」ですｗおたのしみにｗ

「ｔａｘｉ」（前書き）

張りつめた状況でも一歩もひかない美優夢

午後の静かなカフェに緊張が走る

「ｔａｘｉ」

「あんたさ！　確かに私達がうるさかったかもしれないけど

その態度は何なの？　あんた男でしょ？

悩んでいる位だったら行動してみればいいじゃない！！！！

行動に移してこそ初めて悪い所がわかる　そしてそれを自分で

解決し正していく・・それが男ってもんじゃないの？」

男の眼を真っ直ぐにみて話しを続ける

「それなのにあんたは何？考え事してるって？

考えてもわからないのに考えて行動しないからそんなにイライラ

するんだよ！それに八つ当りまでしちゃってさ

男としての価値を疑うよ！！！！」

最後まで眼をそらす事なく美優夢は言い放つ

すると男はしっかりと見られた美優夢の眼を見る事ができない

それでも男は眼をそらしながら

「いったいお前は何なんだよ？偉そうに言いやがって！！」

再び凄んで美優夢に言う

「あんたさ　今眼をそらしていったでしょ？人はね

やましい事がなければ真っ直ぐに眼を見て話すもんなんだよ！

そうやって眼をそらしたって事は図星なんでしょ？そうやって眼を

そらしながら凄まれても全然怖くなんかないんだよ」

そう美優夢が言った後

タオルを取りに行った達矢が二人の横で呆然と立ち竦む

依里加に

「ほら　依里加タオル　タオル取って来たよ」

そう言って依里加にタオルを渡す

依里加はそれでようやく我にかえり

「お　お姉ちゃん一体何言ってるの？　お客様本当に申し訳

ありませんでした」

そう言ってタオルで水で濡れた男のスーツを拭こうとすると

男は依里加の手を振り払って
テーブルを激しく叩き
「バン！！！！！！」
「もういい！こんなに不愉快な思いをしたのは初めてだ帰る！！」
男はそう言い放つと
出口へと向かった
「お客様お待ちください本当に本当に申し訳ありませんでした」
その必死な依里加の声も届かず
カラン　カラン　バタン！！！
男は激しくドアを閉め出て行ってしまった
「お待ちください！！」
男の後を追い
達矢と依里加も慌てて外にでる
それから数分後・・・
カラン　カラン

「ハァ・・・」

大きなため息をつきながら二人が戻って来た

そして依里加は

美優夢に向かって

「もう！お姉ちゃん何てことするんだよ！！

さっきのお客さんものすごく怒ってて私達が必死で謝っても

聞いてもらえなくてそのままタクシーに乗って行っちゃたよ！！」

そう言って呆れた眼差しで美優夢を見つめる・・・・

（続く）

次回第６話「ｔｉｃｋｅｔ」ですｗお楽しみに♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8542o/

ＭＹ　Ｄｒｅａｍ　「僕の全ての悲しみは雨となり君の悲しみ全てを流しさり

2010年11月15日17時17分発行